

論文

令制国における神社の主祭神の 構造特性に関する基礎研究

——社寺観光に向けた一宮・二宮・三宮の分析——

河内良彰

〔要旨〕

コンテンツツーリズムは、ストーリーやキャラクターなどの諸要素が意味を付与する現場を訪れ、身体的な実感を目的とする新しい観光である。その広義の概念に含まれる「社寺観光」のうち、「神社巡り」に向けて各社・各宮の主祭神がもつ構造特性を分析し、実践と研究の見通しを立てるための知見を示す。

令制国の一宮・二宮・三宮を研究対象とし、神宮と律令制の68箇国に鎮座する197社の主祭神147柱を体系化する。主祭神の出現回数、[地方]と主祭神との対応関係、「五畿七道」における[三大祭神]の出現比率を明らかにする。

第1に、東日本の神社に卓越する大国主神を祀っている神社が全国最多を占めていることが明らかとなった。第2に、九州では天皇・皇族、西日本では天津神、東日本では国津神を祀っている割合がそれぞれ最も高いことが判明した。第3に、対応分析の結果、五畿と南海道が最も乖離した。

キーワード：コンテンツツーリズム、社寺観光、神社巡り、令制国、主祭神

I 問題意識

黄霧四塞が国内外に立ち込めて我が祖國大いに乱れて年久しく、奇しくも大海原を越えて蔓延る疫病に唐突な戦禍が追い打ちをかけている。今まさに、隣国と手を取り合って耐性を高め、一丸となって迷霧を払っていく時機をうかがうことが上策である。

現在、急激な円安が追い風となってインバウンド旅行者の需要回復の兆しが見える中、新たな観光振興策のひとつとして、日本固有の観光資源として世界に誇る神社仏閣に注目が集まっ

ている。国内の効果的な観光振興のための一施策、「テーマ別観光」⁽¹⁾は、特定のテーマや観光資源に高い関心をもつ旅行者の需要を喚起し、そのような旅行者を広域的に誘客して観光地間の回遊を促す手段である。観光庁が2016年度に開始した「テーマ別観光による地方誘客事業」⁽²⁾では、複数の観光地に成功事例と課題を共有してもらうために、文化財や星空観賞などの特定の観光資源の活用を試みる地方公共団体や観光協会を対象に実施された。地方の観光資源の磨き上げや全国誘致を目標に掲げ、関連する事業者との経済的および人的なネットワークの拡大に取り組む観光事業者が重点的に支援されてきた。

観光に関する世界的な最新動向のひとつは、旅行会社が提供する他律的な商品に満足できなくなった旅行者の増加である。オーダーメイド型や目的型と呼ばれる旅行プランを嗜好する旅行者が増え、「団体型から個人型へ、周遊型から体験・交流・滞在型へ」（篠原2013, p.74）と換言される旅行形態が成熟しつつある。視点を押し広げると、都市部よりも地方を訪れる意向をもつ訪日外国人旅行者の増加基調を受けて、様々な旅行者のニーズに応えるための「地方型コト消費」⁽³⁾への対応が急務となっている。訪日外国人旅行者一人当たりの消費単価と娯楽等サービス費以外の消費額の向上、観光消費額のより一層の拡大が期待される場所である。設備投資による新たな観光資源の形成が比較的容易となるため、地方へのインバウンド誘致を促すうえで重要な施策のひとつとして位置づけられる。

国土交通省は、真の豊かさにつながる新しい生活空間の創出に向けて、日本人の感性や美意識を公共空間に積極的に取り込んでいく施策の方向性を打ち出した（国土交通省編2019, pp.70-77）。背景にあるのは、かつてのメディチ家や藤原氏らが文芸の保護に努めたように、専ら権力者が和歌や絵画などの芸術の復興を促した文化史を経て、いま多様な文化に接して心動かされる日本人ひとり一人がその支援者になれるという新たな時代認識である。かくして、観光先進国の実現と美しい国づくりに向けて「インフラツーリズム」が評価されるようになり、世界に誇る地域固有の土木技術などを観光資源として利活用する試みが始まった⁽⁴⁾。地域に眠る古民家を含む歴史的資源を宿泊施設などに再利用するために、相談窓口の開設やガイドラインの策定、小口投資の活用を奨励し、訪日外国人旅行者の誘致に向けた広域観光周遊ルートの構築、それらを世界水準のサービスへと昇華させるべく、テーマ別観光による地方誘客事業を推進している（国土交通省編2019, pp.139-144）。

本研究は、テーマ別観光やコト消費の構成要素の中で「神社・仏閣と地域のコミュニティが一体となり、訪れた観光客が地域の歴史や文化・風習を学び、体感するツーリズム」（観光庁2022年8月31日）と定義される「社寺観光」に焦点を絞る。全国に点在する神社・仏閣を様々なテーマで繋いで地方への誘客を図るべく、関係者間のネットワーク形成を支援するこの新しい観光は、経済発展と文化交流の活性化に資するとともに、日本の歴史や文化に対する旅行者の理解を深めることに寄与する。現在は「寺社の歴史や伝統文化に触れる観光全般」（全国社寺観光協会2021年10月29日）と呼称される「寺社観光」も周知されている中、全国寺

社観光協会によると、本来の神社仏閣は信仰や心の拠り所、教育の場として古くから人々の生活の中心に位置し、必ずしも観光の対象ではなかった。しかし、時代とともに寺社と人々の関係性は変化し、昨今の観光ブームでその存在感が益々高まっている。全日本社寺観光連盟と共通する目標は、一人でも多くの旅行者を寺社に誘致し、日本の歴史や文化に親しんでもらうことにある。観光庁への事業登録やテーマとの関連において社寺観光と表記するが、寺社界の様々な活動や取組を超宗派・超宗旨で紹介する情報誌『寺社 Now』は、協会が隔月発行して連盟のサイトへ引用されている。神社仏閣を観光資源とする点において、社寺観光と寺社観光との大きな違いを見出すことは難しい。

戦後、神社仏閣の在り方について、観光事業の側面から議論の糸口を見つけた斎藤(1953)は、「わが国民の敬神崇祖、更には神仏を尊ぶという美風と相俟って自然のうちに国民の脳裡に刻まれて来た」(p.22)と神社仏閣の存在意義を強調しつつ、「現在の神社では維持運営に恵まれているのは客観状況もさることながら観光客、参拝客の多い神社に限られる」(p.23)と述べて、その後の神社運営が観光事業に大きく左右されることを指摘した。さらに、氏は中世の神社仏閣の経済史を引用し、「社寺自体も敬神、信仰の対象であるとともに一種の総合的な企業であった」(p.24)と回顧したうえで、「神社仏閣は旧套を脱し、従来のような孤立した存在ではなく、組織と計画をもって自ら観光事業に乗り出すことが必要である」(p.25)と認識を新たにした。最近では「神社はどんなポテンシャルをもっているのか」と問うて、文化遺産観光の要所としての神宮と熊野那智大社との比較研究に取り組み、「“神”がいる手つかずの自然のある場所」(p.118)を共通項と見出したポグゲンドルフ(2019)は、神聖な場所の特別さやスピリチュアルな内的体験を引き立たせるために、慣習に捉われない質の高い観光サービスの創出を要訣としている。

若者の宗教離れが進む現在、参拝客の裾野を広げるために“開かれたお寺”を目指す動きが全国で拡がり、その試みが広く報道されている⁽⁵⁾。人口減少に伴って檀家が減り、全国約10万の寺院のうち3割以上が存続の危機に直面し、社寺に対する若年層の関心の低さがこうした動きに拍車をかけている⁽⁶⁾。寺院がもつ日本独特の雰囲気と大勢が集まれる広い空間を活用し、アイデアを凝らして従来のイメージとは異なる特色を掲げることで、檀家の増加と地方創生につながる(日本経済新聞2017年8月4日；日本経済新聞2018年2月22日)⁽⁷⁾。一部の神社は、祭神をモチーフにしたキャラクター化やパネル掲出による広告宣伝、キャラクター関連商品、神様マップの作成と販売などに取り組み、神社の周知徹底を進めて収益体制の強化を図ろうと試行錯誤している(読売新聞2018年10月30日)。

こうした新しい取組を成功に導くためには、社寺の立地や近隣の複合的な観光資源をはじめ、従前に明明白白の由緒やインバウンドを誘引する固有の宝物や事跡のみならず、全体構造のうえで評定される其々の特性を俯瞰して示す必要がある。ことに、日本の神社数は約8万1,000社(文化庁編2018, p.36)に上る中、各国・各社に鎮座している主祭神はどの位置にあ

り、いかに埋め込まれているのであろうか。本研究は、「神社巡り」の基礎資料を提供して実践と研究の端緒を開くことを目指し、律令制の國國と全国の主要な神社の主祭神との関係性に関する探索型分析を行い、その構造特性を把握することを課題とする。

II コンテンツツーリズム論の拡充

今現在、社寺観光や神社巡りに関する文献は皆無に等しいが、一に『月刊観光』⁽⁸⁾の2004年4月号に組まれた「観光の原点を探る“社寺参り”」（日本観光協会編2004）と題する特集がある。天孫降臨の伝承に基づく夜神楽などを代表的な観光資源とする宮崎県高千穂町のほか、冬季オリンピックを契機に冬季の「長野灯明まつり」を創設した長野県の取組などが紹介された。作家の金森敦子は、オランダ東インド会社の医師、エンゲルベルト・ケンペルの『江戸参府旅行日記』を引用し、内宮・外宮の御師らの猛烈な宣伝活動によって、多くの旅人の目的地となった神宮の歴史を解説した。江戸時代後期に入ると庶民の知識が向上し、豪華絢爛な寺院に足を運んで歴史や謡曲の舞台を確かめるために、名所旧跡を巡るコースが旅の案内役の先導で計画され、参詣がより魅力あるものに変容したと書いている。

本研究と関係する「コンテンツツーリズム」の先行研究をみていくと、コンテンツツーリズムとは、地域固有の雰囲気・イメージに“物語性”や“テーマ性”を付加し、「地域に関わるコンテンツ（映画、テレビドラマ、小説、まんが、ゲームなど）を活用して、観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズム」（国土交通省・経済産業省・文化庁2005, p.49）を意味する和製英語である。この報告書と経済産業省のクールジャパン政策が推進された過程で、ポップカルチャーを活かした観光振興のイメージが補強された。しかし、その後、コンテンツとは「人間の活動が生んだ情報または情報の組み合わせ。“物語”や“作品”そしてそれらを構成する諸要素（物語性、キャラクター、ローケーション、サウンドトラックなど）」と拡充され、「こうしたコンテンツによって意味が与えられた場所を実際に訪れ、当該コンテンツを身体的に実感・経験しようとする行為」（山村2016, p.10）とコンテンツツーリズムが再定義されている。こうした見方は、“物語を旅する”（増淵2010）と端的に表現される「歌枕」⁽⁹⁾を題材にした旧時の旅が見直されることで、コンテンツツーリズムが何世紀も前から日本に存在した旅の一形態と解されていることに根拠がある。

増淵敏之によると、主たる分析対象は、映画やドラマのロケ地、マンガやアニメの原作地、ご当地ソングの故郷を目的地とする“巡礼”である。ただし、その起源に関する節では、江戸時代以降の旅行の一般化・大衆化にふれて「神社仏閣巡りも一種のコンテンツ・ツーリズムといえる」（増淵2010, p.30）と敷衍しており、この言に従えば、特定の場所に関する固有の事跡やキャラクター、ストーリー性の観光資源化を進めて、個性や関心領域が発達している新しいタイプの旅行者を誘致する目的と方法において、社寺観光をコンテンツツーリズムの枠内に

組み込んで論じることができる(図1)。

最近では、観光地のプロモーションではなく、旅行者の自発的関心に基づく訪問が契機となり、まちおこしにつながる事例が散見される。国内では、“アニメ聖地巡礼”に熱狂する所謂“オタク”の旅行行動に準えて「旅行者主導型コンテンツツーリズム」が分立し、個人化、多様化、能動化が進む現代社会で、こうした新しい形の観光が他のツーリズムにも立ち現れる可能性が示唆された(岡本 2012)。実在する場所や建物⁽¹⁰⁾が作中に描かれ、視聴者やファンの感興をそそって憧憬的となることで、その舞台現場が観光地化されて地域内の消費額が高まることが期待されている。同様に、コンサートを開く“アイドル”を追いかけることに没頭するファンの熱い“ロマン主義的まなざし”が定義付けられ、著名人の移動地を巡るという最新の旅行行動の芽生えが報告されている(岩崎 2014)。これらは“感性主導のツーリズム”や“憧れの人を追うツーリズム”と肯定的に評価されるものである。

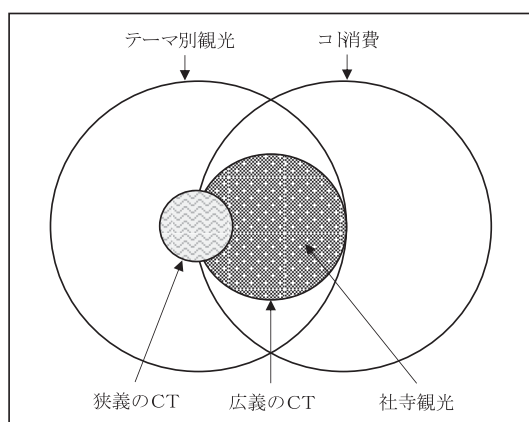


図1 「社寺観光」の領域
(資料) 筆者作成

かたや国外の一例では、世界文化遺産に登録されているイギリス・湖水地方の付加価値を高めるために、イギリスの絵本作家、ビアトリクス・ポターが1902年に出版した代表作『ピーターラビットのおはなし』に登場するウサギのキャラクターを活用し、持続的な観光地づくりの実践が見られる(宮崎 2016)。地域固有の“物語を背負ったキャラクター”に過度に依存するリスクの管理、カスタマー・インのマーケティングが徹底され、一過性の集客に終始しない観光地が成り立っている。また、フランス・ルルドにおいては、巡礼者の目的地となるマサビエルの洞(ルルドの泉)や聖母マリア像など、聖地の場所性が敬虔な祈りの対象である。このうえ、洞窟内で白い貴婦人の出現に立ち会ったとされる少女ベルナデットを追隨できる聖女ベルナデットのキャラクターと物語性に関する展示や表象が、世界の巡礼者がルルドを訪れる一因となっている(羽生 2019)。

着目する対象こそ異なるが、パーソナリティや物語が優先的な観光要素と見なされて場所性

がそれに従属することによる新奇な観光需要に対応するためには、多様なツーリストの個別の心裏を汲み取るための基本的・総合的な事実認識に基づく実践が欠かせない。

神社や祭神に関する既往研究をみていくと、歴史学や民俗学、神道学、社会学などの成果がアーカイブス化されている。参考までに、特定の地理的境界への着目を基に、当該エリアの神社に祀られている祭神と信仰の背景を検討した研究がある（保坂 2017；友田 2012；宮本 1997；宮本 1998）。特定の神社に対する問題意識から、当該社に祀られている祭神と信仰の背景を精査した研究も見られる（池尻 2011；渡辺 2020；北條 1997）⁽¹¹⁾。このほか、特定の祭神への関心に従い、当該神を祀る全国の神社の由緒や特徴を網羅した研究があり、一例として天皇とその近親者を祭神とする全国の神社を調査した足立（2001）がある。

管見によれば、コンテンツツーリズムや神社巡りに関する既往研究では、日本全国を把握する観点や定量的な手法が十分とは言い難い。ことに、素戔鳴尊、大山祇神、大山咋神という日本の支柱たる神神を祀っている全国の神社に着目した平泉（2019）は、祭神別神社分布図として 1 枚の日本列島の地図に各社の位置を描出した。各分布の特徴を詳細に集成し、神社と祭神に関心のある旅行者に全国回遊を促す情報を提供し、旅行の広域化と多角的な観光消費に貢献しているといえる⁽¹²⁾。本研究も広域的・鳥瞰的な視点を採り、神社の成り立ちや祭神、祭祀、社殿の構造にまで関心を寄せて来日するインバウンド旅行者を想定し、神社巡りの一助となる各国と主祭神の位置の把握に向けた知見を明らかにする。

Ⅲ 研究方法

1. 分析データと地方区画の概要

本研究では、令制国の一宮・二宮・三宮⁽¹³⁾に着目し、神宮と律令制の 68 箇國（66 國 2 島）に鎮座する 197 社に祀られている 147 柱の主祭神を分析データとして扱う⁽¹⁴⁾。また、一宮から三宮までの社格が論じられている神社⁽¹⁵⁾も分析対象に加える。こうして収集された分析データは、主祭神 147 柱のうち国津神 35 柱、天津神 54 柱、天皇・皇族 25 柱、その他・不明 33 柱で構成されている。その作成に際して各社・各宮や都道府県神社庁のウェブサイトを開覧したほか、不明な点を神社や自治体の教育委員会に個別に問い合わせた。

符号化の過程で父系の神祇を原則的にその子孫に承継し、各社・各宮のウェブサイト等と照合し、大物忌神を豊受大神（鳥海山大物忌神社）、熱田大神を天照大神（熱田神宮）、大御食津姫命を豊受大神（恩知神社）、由良比女命を和多須神（延喜式神名帳）、すなわち少童命と同定する。大物主神を大国主神と同一の神⁽¹⁶⁾、事代主神を大国主神と異なる神として対象化する。天神地祇、天皇・皇族の別が不明のため、その他・不明とした一宮の主祭神は、伊佐波登美命（志摩國・伊射波神社）、志波彦大神（陸奥國・鹽竈神社）、氣比大神（越前國・氣比神宮）、白山比咩神（加賀國・白山比咩神社）、櫛日方別命（同・石部神社）、二上大神（越中國・二上射

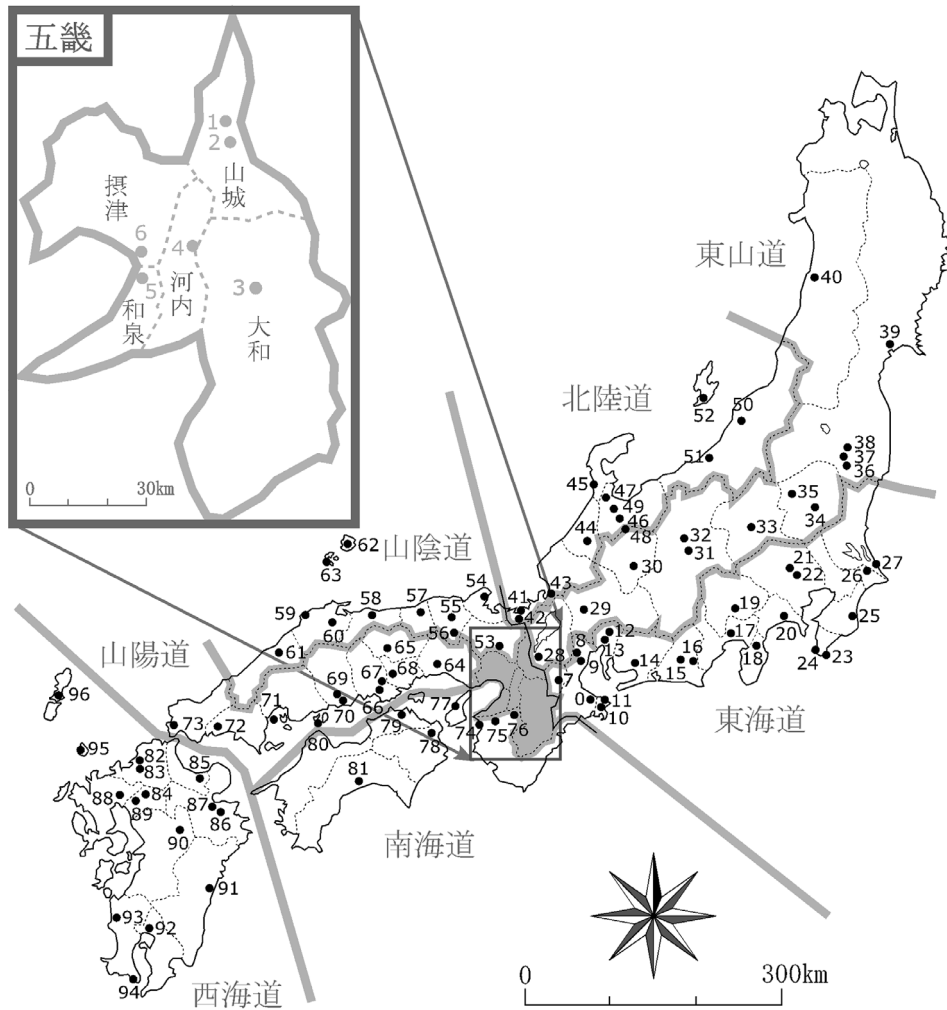


図2 「五畿七道」の地方行政区画と一宮の位置図

注：0. 神宮 1. 加茂別雷神社 2. 加茂御祖神社 3. 大神神社 4. 枚岡神社 5. 大鳥大社 6. 住吉大社 7. 取國神社 8. 椿大神社 9. 都波岐神社・奈加等神社 10. 伊雜宮 11. 伊射波神社 12. 真清田神社 13. 大神神社 14. 砥鹿神社 15. 小國神社 16. 事任八幡宮 17. 富士山本宮浅間大社 18. 三嶋大社 19. 浅間神社 20. 寒川神社 21. 氷川神社 22. 氷川女體神社 23. 安房神社 24. 洲崎神社 25. 玉前神社 26. 香取神宮 27. 鹿島神宮 28. 建部大社 29. 南宮大社 30. 水無神社 31. 諏訪大社上社 32. 諏訪大社下社 33. 貫前神社 34. 二荒山神社 35. 日光二荒山神社 36. 都々古別神社(八槻) 37. 都々古別神社(棚倉) 38. 石都々古別神社 39. 志波彦神社・鹽竈神社 40. 鳥海山大物忌神社 41. 若狭彦神社 42. 若狭姫神社 43. 氣比神宮 44. 白山比咩神社 45. 氣多大社 46. 高瀬神社 47. 氣多神社 48. 雄山神社峰本社 49. 射水神社 50. 彌彦神社 51. 居多神社 52. 度津神社 53. 出雲大神宮 54. 籠神社 55. 出石神社 56. 粟鹿神社 57. 宇倍神社 58. 倭文神社 59. 出雲大社 60. 熊野大社 61. 物部神社 62. 水若酢神社 63. 由良比女神社 64. 伊和神社 65. 中山神社 66. 吉備津神社(備中國) 67. 吉備津彦神社 68. 石上布都魂神社 69. 吉備津神社(備後國) 素盞鳴神社 71. 巖島神社 72. 玉祖神社 73. 住吉神社 74. 日前神宮・國懸神宮 75. 伊太祁曾神社 76. 丹生都比賣神社 77. 伊弉諾神宮 78. 大麻比古神社 79. 田村神社 80. 大山祇神社 81. 土佐神社 82. 宮崎宮 83. 住吉神社 84. 高良大社 85. 宇佐神宮 86. 西寒多神社 87. 柞原八幡宮 88. 與止日女神社 89. 千栗八幡宮 90. 阿蘇神社 91. 都農神社 92. 鹿兒島神宮 93. 新田神社 94. 枚間神社 95. 天手長男神社 96. 海神社

(資料)『辞典』pp.110-114,「諸國一の宮一覧図」を基に『延喜式神名帳』も参照して筆者作成。

水神社）、伊豆志八前大神（但馬国・出石神社）、天日槍（同）、水若酢命（隠岐国・水若酢神社）、鏡作神（美作国・中山神社）、日前大神（紀伊国・日前・國懸神宮）、国縣大神（同）、丹生都比売大神（紀伊国・丹生都比賣神社）、高野御子大神（同）、一言主（土佐国・土佐神社）、高良玉垂命（筑後国・高良大社）である。ただし、彦五瀬命、稲飯命、三毛入野命を天津神、聖大神、座摩神、猿田彦命、波布比売命、志那都彦神、寒川比古命、寒川比女命⁽¹⁷⁾、素戔鳴尊、大宜都比売命を国津神とする。なお、天神地祇の判別の際、「比売神」をどちらに分別すべきかという問題がある。豊前国一宮・宇佐神宮では宗像三女神を意味するが、河内国一宮・枚岡神社では天兒屋命の後神、天美豆玉照比売命の別称である。ゆえに、枚岡神社の比売大神⁽¹⁸⁾を天津神、上野国一宮・一之宮貫前神社の比売大神⁽¹⁹⁾をその他・不明に分類する。豊前国一宮・宇佐神宮と相模国一宮・鶴岡八幡宮、対馬国一宮・厳原八幡宮神社の比売神（比売大神、姫大神）は宗像三女神と同視し、個別に集計する⁽²⁰⁾。

日本列島を令制国の上位区分、「五畿七道」（図 2）⁽²¹⁾で把握し、其々の領域を〔地方〕と表記する。東海道は、五畿から東方へ太平洋沿岸諸国を連絡した 15 箇国、東山道は、五畿から北東方へ山間の諸国を連絡した 8 箇国、北陸道は、五畿から北東方へ日本海沿岸諸国を連絡した 7 箇国が連なる。他方、山陰道は、五畿から西方へ日本海沿岸諸国を連絡した 8 箇国、山陽道は、五畿と大宰府を瀬戸内海沿いに連絡した 8 箇国、南海道は、五畿から四国に至る 6 箇国、西海道は、現在の九州と同じ領域の 11 箇国（9 国 2 島）で組織される。

分析データの整理と作成に際しては、〔地方〕と律令制の國國に祀られている主祭神とのクロス集計を取付きとする。〔地方〕で信仰が厚い主祭神を社格の順に列記し、神名ごとに読点を打ち、一箇国の神名の記述を終えるごとに句点で区切り、一文とする。同様に、別の一箇国の神名を記述して文章化を図り、分析可能なデータを作成する。本分析で扱う全てのデータは固有名詞となるため、強制抽出する語として事前処理を行う。総括的な分析として、第 4 章第 3 節では〔地方〕をさらに「九州・西日本・東日本」の大区分で論じる⁽²²⁾。

2. テキスト分析の手法

本研究の特徴は、律令制の國國に鎮座する一宮・二宮・三宮の主祭神を分析データとして作成、体系化し、テキスト分析に基づいて構造特性を浮かび上がらせることにある。

コンピュータを用いた質的データ分析の先駆者、ウド・クカートツ（Kuckartz, 2014）によると、1910 年に開催された第 1 回ドイツ社会学会大会の席上で、マックス・ウェーバーが「コンパスとハサミを手にとって、この一世代の間に新聞の内容が量的な面においてどのような変遷を遂げてきたかという点について測定してみる必要がある」と述べて、新聞の記述内容の変化に関する調査を提案したことを内容分析の起源とする。古典的内容分析で新聞記事のサイズの計測が求められたように、テキストの顕在的な内容と量的な側面に関する分析に焦点が当てられ、1940 年代以降に統計的な性格が強くなっていった。その後、客観的な意味や解釈

の妥当性に限らず、間主観的に伝達可能な内容の潜在的な「意味」をも含めて分析対象とすることが求められ、ジークフリート・クラカウアーによって質的内容分析が提唱された。その後の研究を経て、質的テキスト分析とは、「顕在的な内容」に限定される古典的内容分析と比べて、テキストの内容に関する理解と解釈の作業がはるかに大きな役割を果たすことになる分析スタイルと定義されるに至った。このような過程を経て、QDAソフトウェア、MAXQDAが開発され、1995年より世界中で使用されている。

国内の内容分析の展開について、KH Coderの開発者、樋口耕一(樋口2014)によると、コンピュータを利用する分析の際には、データが日本語であることが大きな意味をもつ。日本語の文字数は15万種類以上ときわめて多いうえ、英文のスペースのような語と語の間の明確な区切りがない。英語データは単純な処理で語が取り出せて、頻出語リストの自動作成も容易である。しかし、日本語データで同様の処理を行うためには、形態素解析のような自然言語処理の分野の成果を待たねばならなかった。そのため、国内での普及・発展は十分とは言い難いが、優れて先駆的な試みもいくつか挙げられ、量的分析が質的分析に取って代わろうとするものでもなく、両者を相補的に用いる方法こそ合点がいく。既往研究ではアンケートの自由回答だけでなく、新聞記事や雑誌記事、宗教教典等も分析対象となっている。量的方法と質的方法を相乗的に用いたうえで、質的な分析・記述に重点を置いて最終的な報告がなされる場合があり、量的にすくい取ることが難しい部分、すなわち質的データの面白さと呼ばれるような部分がより明確になる。両手法を循環的に用いるという考え方を内容分析以上に重視し、日本語・英語という言語の壁を越えた方法論的示唆が得られる。かくして、計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法」(p.15)と概念が拡充され、質的データを基に計量的な手法で分析するためのソフトウェア、KH Coderが2001年より流通している。

コーディングルールを作成することで曖昧性を解消できる利点があるほか、自然言語処理が取り入れられているため、それ以前のソフトウェアと比較して処理精度が大きく向上した。質的データを取り扱う場合、これまでは素データの中から分析者が典型的と考える箇所を引用、解釈する方法が少なくなかった。しかし、計量的な分析手法を採用することで、次のような利点が得られるとされる(pp.5-7)。第1に、データ全体の傾向を素データがどの程度代表するかを数値で表示できる(客観性の向上)。第2に、データの収集と分析の過程を他の研究者が監査、再現できる(信頼性の向上)。第3に、質的なデータがもつ見過ごされがちな側面が明らかとなることがある(データ探索の可能性の向上)。このソフトウェアを使って語をいかにして分析するかについては、次の解説文が明快である。

〈人間がいざという間際に、誰でも悪人になる〉というデータからは、“人間”、“いざ”、“間際”、“悪人”、“なる”などの語が取り出される。いったん語を取り出せば、どんな語が多く出

現していたのかという頻度表を作成することができる。（中略）。また、どの語とどの語が結びついていたのか、もしくはどの語とどの語がよく一緒に用いられていたのかを集計することができる。具体的には、コロケーション統計の形で集計することができるし、共起ネットワークを描くこともできる。共起ネットワークとは、よく一緒に用いられていた語のペアを線で結んだ図である。最後に、データがいくつかの部分に分かれている場合は、それぞれの部分に特に多く出現する語、すなわちそれぞれの部分に特徴的な語を探ることができる。Jaccard 係数や Dice 係数をもとに特徴的な語を探して一覧表を作成することもできるし、対応分析によるグラフィカルな探索を行うこともできる（樋口 2017, pp.36-37）。

まず、主祭神として祀る神社数に基づく順位付け、詰まる所、主祭神の出現回数を図化し、その特徴を概観する。次に、五畿七道における主祭神がもつ特徴について、二次元の散布図を描出して解釈を容易化すべく、[地方]と主祭神との対応分析を試行する⁽²³⁾。最後に、「国津神」、「天津神」、「その他・不明」、「天皇・皇族」のコーディングに基づく分析を行う。神社の主祭神の大宗は、『古事記』上つ巻と『日本書紀』神代の巻に記された神神にほかならない。元々は高天原に存在し、高天原で誕生して降りてきた神神、高い信仰の対象となる天津神である。他方、天津神の天孫降臨以前から葦原中国を治めていた地祇、国津神が厳然として鎮座している⁽²⁴⁾。初代天皇、神武天皇の東征以降の天皇・皇族も一定数を占めている。先行する2つの分析を実施したうえでコーディングに基づく分析を行い、いずれの天神地祇、神神の出現比率がいかなる[地方]で相対的に高くなるかを明らかにする。

IV 分析結果

1. 主たる主祭神の順位と特徴

分析対象とした全国に鎮座する主要な神社、律令制の國國の一宮・二宮・三宮について、主祭神として祀っている神社数、すなわち主祭神としての出現回数を順位付けた（図3）。第1位に東日本に卓越する大国主神（32社）、第2位に応神天皇（19社）、第3位に神功皇后（13社）が上がった。続いて、天照大神（11社）、素戔鳴尊（9社）、市杵島姫神（8社）、田心姫神（同）、仲哀天皇（同）、彦火火出見尊（同）、住吉三神（同）、事代主神（7社）、木花之佐久夜毘売命（同）、豊玉姫（同）の順に高順位をとった。

素戔鳴尊の子、6世の孫ともされる大国主神を仰ぐと、東日本の神社で祀られている傾向がやはり根強い。山陰道では、出雲國一宮・出雲大社を始め4社で祀られ、山陽道では、播磨國一宮・伊和神社のほか、周防國二宮・出雲神社で事代主神とともに崇められている。五畿では大和國一宮・大神神社の1社、西海道では日向國一宮・都農神社の1社のみで主祭神となっているが、南海道の対象では祀られていない。

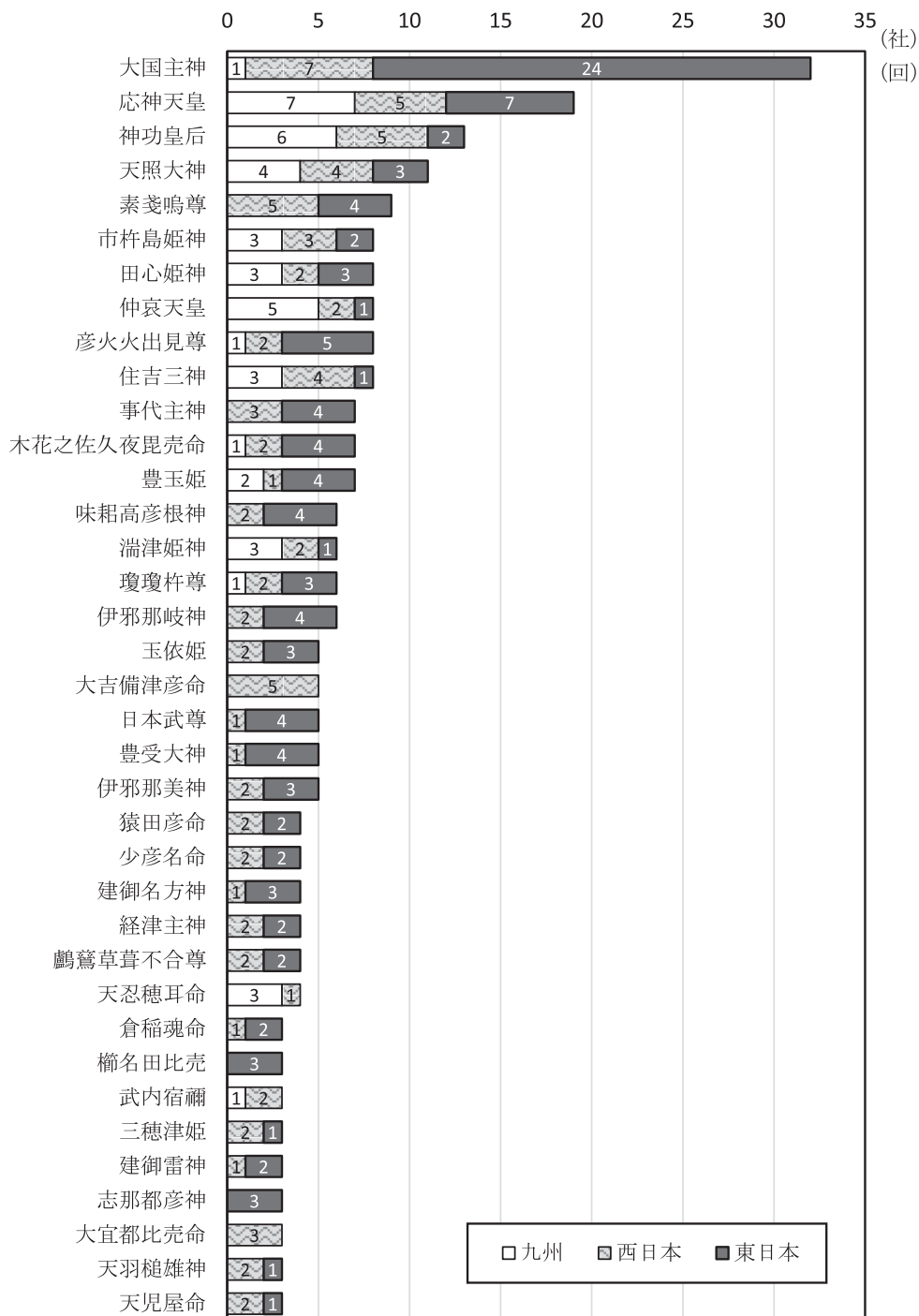


図3 主な主祭神の神名と当該神を祀っている神社数 (主な主祭神の出現回数)
 (資料) MAXQDA の分析を基に筆者作成

菟道稚郎子皇子，大鷦鷯尊（仁徳天皇）ほか多数の皇子女を授かった第15代の天皇，応神天皇は，比較的に関西道の神社で祀られている。八幡宮⁽²⁵⁾の主祭神に数えられるほか，筑後國一宮・高良大社でも高良玉垂命と住吉三神とともに尊崇を受けている。第3位となった仲哀天皇の皇后，神功皇后も八幡神として応神天皇や仲哀天皇とともに合祀されていることが多く，壹岐國一宮・興神社と同二宮・聖母宮を含めて，主祭神としての信仰圏は広い。両神はしばしば住吉神社にも合祀されている。

素戔嗚尊に謁すると，東は武蔵國一宮・氷川神社に櫛名田比売・大国主神とともに合祀され，西は備後國一宮・素戔嗚神社で崇敬を集めている。五畿と南海道，西海道の対象では祀られていない。日向を舞台に識されている彦火火出見尊は，東は上野國三宮・三宮神社に豊玉姫と少彦名命とともに合祀され，西は大隅國一宮・鹿児島神宮に豊玉姫とともに崇められ，広域的な信仰を集めている。参河國二宮・知立神社と但馬國一宮・粟鹿神社を除き，少童命の娘で后神の豊玉姫と併せて崇敬されているのが特徴で，五畿と南海道の対象では祀られていない⁽²⁶⁾。大国主神の子で神言を代行する託宣の神，事代主神は，東は伊豆國一宮・三嶋大社から西は周防國二宮・出雲神社まで信仰が厚い。石見國二宮・多鳩神社を除いて，大国主神などの国津神と合祀されており，五畿，南海道，西海道の対象では祀られていない。

とりわけ異彩を放つ分析対象を抽出すると，神明造⁽²⁷⁾と呼称される本殿の建築様式をもつ遠江國一宮・事任八幡宮，その主祭神の己等乃麻知媛命の存在が実に興味深い。宮中祭祀を司る天皇輔弼の神で中臣氏の祖，天兒屋命の母神が一宮の八幡宮の主祭神であることを特筆できる⁽²⁸⁾。この地を春日神と八幡神の結節点や要衝と見なせるのではないだろうか。遠江國に鎮座するもう片方の一宮・小國神社は，主祭神を大国主神，本殿の建築様式を大社造とする。本殿が大社造の神社は，当該社以外では出雲國一宮・出雲大社，出雲國一宮・熊野大社，出雲國二宮・佐太神社，石見國二宮・多鳩神社に限られる⁽²⁹⁾。大社造は，出雲國一宮・出雲大社の周辺に見られる建築様式で，切妻造，妻入りで妻側の柱や中央の心御柱の在り方に古い要素を残している（『事典』p.175）。このほか，長門國一宮・住吉神社で住吉三神，応神天皇，武内宿禰，神功皇后とともに建御名方神が祀られている点を特異な点として指摘したい⁽³⁰⁾。詳細は不明であるが，この主神を信仰する國民の多さを想起させる。

また，石川県白山市と岐阜県白川村に跨り，活火山・白山（標高2,702 m）が聳えている。この霊峰を神奈備とし，加賀國一宮・白山比咩神社と能登國二宮・伊須流岐比古神社に悠然と鎮座しているのは，白山比咩神である。このように自然環境，山々を信仰対象とする神社は，大和國一宮・大神神社（大物主神（大国主神）：三輪山標高467.1 m），越中國一宮・二上射水神社（二上大神：二上山標高274 m），下野國一宮・日光二荒山神社（大国主神：男体山標高2,486 m，田心姫神：女峰山標高2,483 m，味耜高彥根神：太郎山標高2,368 m）である。山麓に拝殿のみを築いて本殿をもたない原始的形式，大和國一宮・大神神社は，拝殿の奥の一角を禁足地に指定し，趣を異にする。富士山（標高3,776 m）を神格化，神奈備とする神社とし

〔地方〕に近接した主祭神は、五畿は天兒屋命や建御雷神等となり、東海道は櫛名田比売、大国主神、素戔鳴尊等が布石を打った。山陽道は応神天皇、天照大神、武内宿禰、田心姫神等が近傍し、西海道は仲哀天皇、神功皇后、住吉三神、市杵島姫神、天忍穗耳命等を含んだ。建御名方神、味耜高彥根神、少彦名命、大国主神等が詰める良の東山道・北陸道は天嶮の地で、経津主神ほか天津神が東海道の方面から廻り込んであたりをかける格好であろうか。

大国主神が東日本の神社に祀られている傾向が強いことは、本章の冒頭で指摘した通りである。然して、東日本を結集する東海道、東山道、北陸道の3つの〔地方〕が取り結ぶ領域で、我が国の主たる国津神が接いだ地合いである。事代主神のほか、建御名方神、大国主神、素戔鳴尊といった面々の厚みがあるように見える。他の〔地方〕と比較し、いずれの神からも遠方に付置したのは南海道となった。原点から離れた主祭神の上位10柱のうち、3柱が五畿に接近し、他の3柱が南海道、残る3柱が東山道に近接した。日本列島における五畿の異質性が浮き彫りとなった一方、原点に最接近した東海道の普遍性の高さを見て取れる。瀬戸内海の要所を占めている南海道と五畿が最も乖離した点、南海道で祀られている大宜都比売命⁽³²⁾が原点から懸け隔てられた点、主たる信仰の根拠地を照覧して天照大神や応神天皇が山陽道に最接近した点などが囁目する所である。

因みに、語と部の関連性を計測する Jaccard の類似性測度の分析によると、〔地方〕に特徴的な主祭神の第一位は、五畿が天兒屋命、東海道が大国主神、東山道が豊城入彦命、北陸道が同率で白山比咩神と沼河北売、山陰道が同率で大国主神と天照大神、山陽道が大吉備津彦命、南海道が大宜都比売命、西海道が応神天皇となった。

3. 五畿七道における〔三大祭神〕の出現比率

国津神、天津神、天皇・皇族を〔三大祭神〕⁽³³⁾としてコーディングし、〔地方〕の項目と差し交わして集計し、分析結果をエクセルで再構成した（図5）。五畿は天津神が72%の割合で鉄心、山陰道も天津神の割合が40%で主要な地位を占めたが、山陽道と南海道は国津神が天津神の割合を上回り、西海道は天皇・皇族の割合が39%を占めて主立った。五畿と山陰道は、天津神が多数を占める共通点こそ判明したものの、前段においても歴々たる通り、上辺において鎮西から五畿までの八方で雲泥万里の差異がある。

ここで、〔地方〕を東日本、西日本、九州に包めて検討すると、九州は天皇・皇族（39%）、西日本は天津神（36%）、東日本は国津神（44%）の割合が最も高いことが明らかとなった。西日本の天津神の割合について、航海により優れて瀬戸内海の要所を押さえている山陽道が五畿七道の中で最低となる25%となった。山陽道の国津神の割合は40%でむしろ東日本に近似し、大区分の平均値を各々の〔地方〕の特徴と見なすことは無理がある。かたや東日本における国津神の割合は、中でも東山道が51%で過半数を占め、東海道が46%、北陸道が43%で拮抗はしているが、いずれも天津神の割合を同様に上回った。

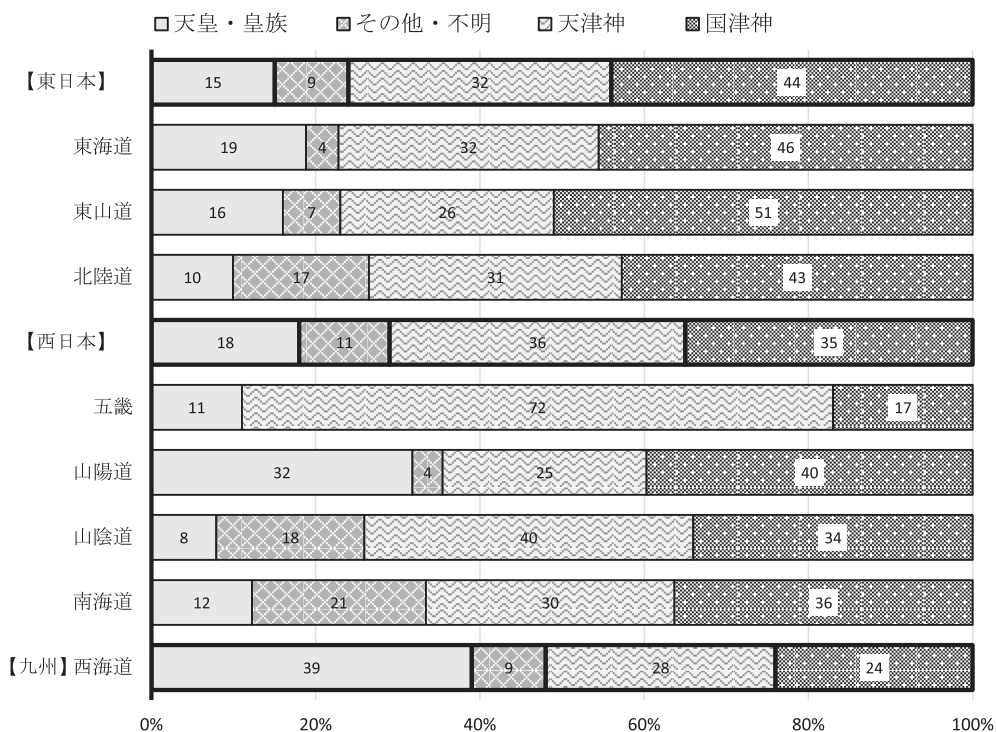


図5 〔地方〕における〔三大祭神〕の出現比率
 (資料) MAXQDA の分析を基に筆者作成

朝鮮半島に臨む西海道については、航海の起点として日本と大陸とを結ぶ機能をもつが、垂仁天皇以降に官家が置かれた任那、百済、新羅、高麗に係っては竺紫がベースとされ、黄梁一炊の逸話が記されている⁽³⁴⁾。葦原中国に降ろうとした際に高皇産靈尊の娘・栲幡千千姫命を娶あわせられ、“天空”で生まれた瓊瓊杵尊を自身の代理として降らせた天忍穗耳命は4柱のうちの3柱が西海道の3社⁽³⁵⁾に祀られ、西海道に重心がかかった。畿内においては、和泉國二宮・泉穴師神社で栲幡千千姫命とともに崇敬を集めている。

最後に、天津神と国津神の両極のいずれの属性が高いかを検討する。最初に、西日本の27箇國を把握すると、天津神のみを主祭神とする國は、山城國⁽³⁶⁾と河内國⁽³⁷⁾の2箇國、一方の国津神のみを主祭神とする國も、大和國⁽³⁸⁾と伊豫國⁽³⁹⁾の2箇國となった。その他の國國では、〔三大祭神〕が編み込まれた径庭のない構図を取った。こうした傾向に付け足して、西日本において天津神がより高位の社格を有するか否かを捕まえると、天津神の社格が高い國は9箇國、同格の國は7箇國、国津神の社格が高い國は9箇國(大和國、出雲國、隱岐國、播磨國、備後國、安藝國、紀伊國、伊豫國、土佐國)という結果となった⁽⁴⁰⁾。かたや東日本の30箇國を詳しく見ると、国津神のみを主祭神とする國は、武蔵國⁽⁴¹⁾と甲斐國⁽⁴²⁾の2箇國であり、対照的に天津神のみを主祭神とする國についても、安房國⁽⁴³⁾のみである。その他の國國

では、片方に偏することのない輪郭を示した。既述の通り、ひとつの國に着目して、どちらの天神地祇が高い社格を有しているかを把握すると、国津神の社格が高い國は14箇國、同格の國は7箇國、天津神の社格が高い國は8箇國（安房國、下総國、常陸國、美濃國、上野國、出羽國、若狭國、加賀國）となった。要するに東日本では、国津神を祀っている割合が高く、そうした神社が相手方よりも高位の社格を有する傾向がある。つまり、西日本は天津神を祀っている割合が高く、そうした神社が相対的に高位の社格を有する傾向を言うならば、東日本と比較した国津神と天津神の立ち位置が転置した様相を呈する。

V おわりに

本研究は、「社寺観光」を広義のコンテンツツーリズムに位置づけ、「神社巡り」に関する実践と研究の方向性を見定めることを目的に、令制國の一宮・二宮・三宮に祀られている主祭神に関する探索型分析を行った。その構造特性の定量的な解明を中心課題に据えて、主祭神の出現回数、主祭神と「地方」との対応関係、「五畿七道」における「三大祭神」の出現比率を分析した。日本列島を俯瞰する3点の知見が得られ、神社巡りの実践の端緒を開いた。

第1に、大国主神を祀る神社が全国最多を占めていることが明らかとなった。第2に、九州では天皇・皇族、西日本では天津神、東日本では国津神が祀られている割合がそれぞれ最も高いことが判明した。補足的に、西日本は天津神を祀っている神社がより高位の社格を有する傾向にあり、東日本は国津神を祀っている神社がより社格を高めている傾向が相対的にみられた。第3に、対応分析の結果、五畿と南海道との関係が最も乖離した。

神社巡りに関する「地方」の観光コースを大掴みに提案すると、東日本の「建御名方神・大国主神」、西日本の「天兒屋命・春日神」、九州の「応神天皇・八幡神」をコンテンツとする“神社巡りの日本三大モデルコース”がある。都からの遠心作用で針路をとり、懐の深い大八洲に漕ぎ出る川上り、扶木に縋り付くための険しい隘路の行程の地平には裾野が拡がり、まことの日本の神威に打たれる。歴朝の差配と諸國民が長きに渡り信仰を守り通してきた古社が、下総・常陸、出雲などの所謂“飛び地”において目を見張る。多くが密なエリアを目的地としがちな求心的な観光行動の転換にもつながっていくに違いない。

『古事記』のストーリーを「中空均衡構造」と解し、『老子』の言辞に基づいて形無きものの支えや均衡の重要性を説いた心理学者、河合隼雄は、所懐の一端を述べている。

外から来る新しいものの優位性が極めて高いときは、中空の中心にそれが侵入してくる感じがある。そのときは、その新しい中心によって全体が統合されるのではないか、というほどの様相を呈するが、時と共に、その中心は周囲のなかに調和的に吸収されてゆき、中心は空にかえる（河合 2003, p.311）。

今や、日本人の生活空間に天神地祇が編み込まれるように鎮座し、東西の太極の事相を端倪しうる輪郭は揺るぎないものとなった。坤の薩摩・日向を跨ぐ旅路は一度の旅路で回遊できるその縮図であり、隣り合う國國でありながら前者に天津神、後者に国津神を祀っており、醸成された異郷の色差しがある。瓊瓊杵尊＝木花之佐久夜毘売命、彦火火出見尊＝豊玉姫、鷓鴣草葺不合尊＝玉依姫に関する森嚴なる大和國家の曙光、神代の誓ひに続く日向の御陰で土扶けて牆と成すコンテンツが香しい⁽⁴⁴⁾。疾うに古の倭の形姿は失われたが、各國・各社の伝統・伝承を回復し、樽木之地に根差した祭神を審らかにすることである。「空見つ日本の国」(宇治谷 1988 a, p.110) を鳥瞰し、我々の根拠地に伝わる祭祀とともに歩もう。

明日は、降りし天孫と寛き國國が和をなす相生の足跡をたどる旅ができるであろう。

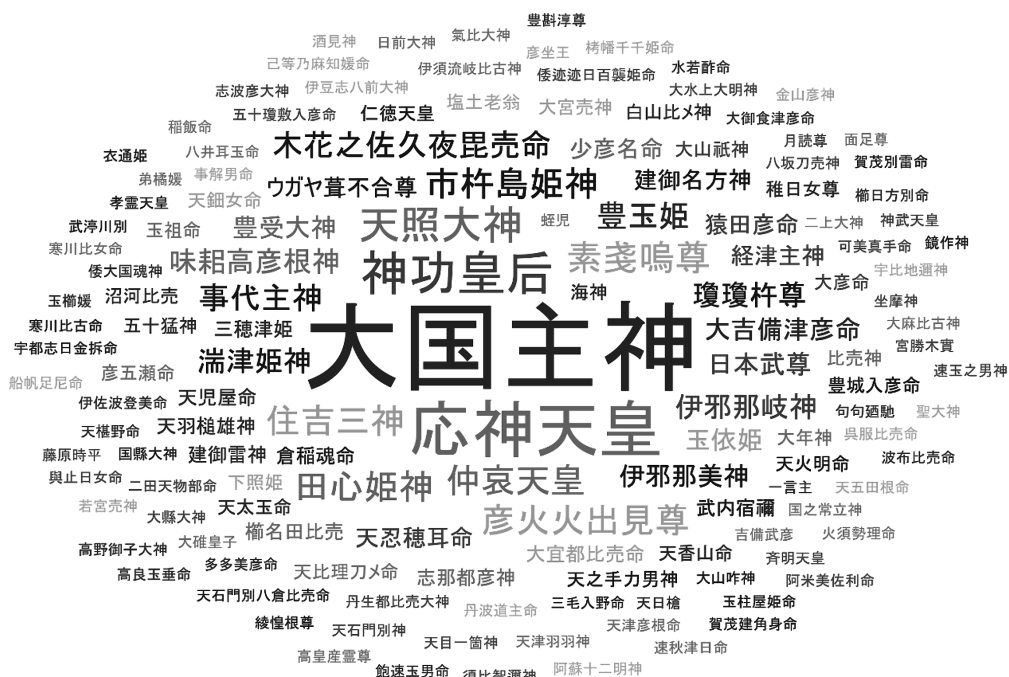


図6 日本における神社の主祭神のワードクラウド

(注) サイズ、尺度は頻度に比例し、頻出語を中心に配置

(資料) MAXQDA により作成

[注]

- (1) これまでは社寺観光のほか、エコツーリズム、街道観光、酒蔵ツーリズム、明治日本の産業革命遺産、ロケットツーリズム、アニメツーリズム、古民家等の歴史的資源、サイクルツーリズム、全国ご当地マラソン、日本巡礼文化発祥の道、忍者ツーリズムなど様々なテーマが挙げられた。
- (2) 支援3年目のテーマは、次の4テーマであった。Industrial Study Tourism, ONSEN・ガストロノミーツーリズム、郷土食探訪～フードツーリズム～、宙ツーリズム(観光庁観光資源課 2020年6月12日)。しかし、2020年度以降は、新規テーマが公募されていない。
- (3) 訪日外国人旅行者は、2012年から2018年にかけて、“三大都市圏のみでの観光”から行動をシフ

- トし、“地方での観光”の割合を年々高めた。そのような旅行者は、スキーやスノーボード、温泉入浴、自然体験ツアー・農山漁村体験、その他スポーツ（ゴルフやマリンスポーツ等）、四季の体感、旅館への宿泊、自然・景観地観光、スポーツ観戦、日本の歴史・伝統文化体験など、体験型観光とも呼称できる「コト消費」を目標にする傾向がある（観光庁編 2019, pp.58-65）。
- (4) 観光庁も地方創生の礎として公的施設・インフラの大胆な公開・開放を推進し、そのための観光コンテンツの一例として、迎賓館のほか、官邸、皇居、京都御所、離宮、日本銀行などを挙げている（観光庁編 2019, pp.119-122）。無論、この中に神社仏閣の敷地や建築物なども入るといえる。
- (5) 夏季の境内におけるビアガーデンの開催や、地元の大学と連携した地元の工芸品の販売、婚活イベントの開催、伝統芸能のライブイベントなど様々な取組が新聞などで紹介されるようになった。
- (6) JTB 総合研究所の調査によると、「社寺に対する興味・知識が低い」と回答した 60・70 代は 3 割にとどまったが、同様に回答した 20・30 代は 5 割に上った。
- (7) 約 80 の寺院が集積する大阪市天王寺区の中心部では、全国寺社観光協会が監修する宿坊が 2017 年に開業し、写経や座禅、護摩だきのほか、精進料理を食する体験が提供されている（朝日新聞 2017 年 4 月 12 日）。また、滋賀県大津市園城寺町の三井寺では、空き家となった境内の僧坊に参拝者を宿泊させる“民泊”が 2018 年に始まった（読売新聞 2018 年 8 月 2 日）。
- (8) 2007 年 3 月号をもって廃刊した。
- (9) 和歌に引用される地名を指す。大和・山城の地名のほか、崇敬される神仏にゆかりのある場所、歴史的な事件のあった場所、語呂合わせにより連想を誘う場所などがある（増淵 2010, p.27）。
- (10) 京都府宇治市のアニメ制作会社、京都アニメーションのテレビアニメ「らき☆すた」では、埼玉県鷲宮町の鷲宮神社や大西茶屋が観光資源化されている。4 コマ漫画が原作の「けいおん!」では、滋賀県豊郷町の豊郷小学校旧校舎群などが舞台となり、一部のファンの“聖地”となっている。
- (11) 本研究の埒外にあるが、池尻（2011）は、祭神変容の背景として吉田神道の影響や、式内社としての高い神格と権威づけの根拠を求めて、神社側の意向で祭神を改めた事例があることを示した。井上（1993）は、享保期以降の経済構造の変化に起因する都市の氏神信仰の衰退、下級宗教者の簇生に伴う街巷の人気をさらう流行神の受容などを背景に、朝廷権威志向の氏神社神職らが主祭神を据え替え、厳かな権威に裏打ちされた由緒を宣伝し始めた事例があることを明らかにした。長い年月の間に、神職の交代や文書の散逸などを理由に祭神不詳となった場合、その後の史料に基づく祭神考証が反映され、祭神の変更があるとされる。勢力図の変化などで社格が変わった事例では、薩摩國は枚聞神社のみが一宮であったが、中世以降に国府に近い新田神社が勢力を増した結果、両社とも一宮と称されるようになった（國學院大学日本文化研究所編 1999（以下、『事典』と略す）、pp.110-114）。北條（1997）は、市杵島姫神の祭祀から秦氏と宗像氏の密接な紐帯を読み取り、北九州からの海人系氏族の移住と定着を研究している。
- (12) 神事や祭神、神社建築のほか、『古事記』と『日本書紀』、各國の『風土記』の記述内容が主要なコンテンツとなる。また事実、「大山祇神」を祭神とする神社は全国に数多く鎮座しているが、全國の一宮・二宮・三宮の中で、大山祇神を主祭神とする神社は、伊豫國一宮・大山祇神社と伊豆國一宮・三嶋大社の二社のみである。兩國・両社の深い紐帯を窺い知れば、南海道から山陽道、畿内を経て東海道に至る長旅に出かけられる。「大吉備津彦命」を主祭神とする神社は、備前國一宮・吉備津彦神社、備中國一宮・吉備津神社、備後國一宮・吉備津神社、備後國二宮・吉備津神社、讃岐國一宮・田村神社の五社である。参拝者の船旅が山陽道と南海道をつぶ。
- (13) 一宮とは、諸國の国内で第一の地位を占めている神社であり、以下二宮、三宮の序列は、準公的な一種の社格として機能している。中央の朝廷による社格は、京畿内中心にゆかりの深い神社を列格し、式内社のうち官幣大社は京畿内中心に全国に散在し、官幣小社は畿内のみにある。国幣大社と国幣小社は、ともに畿外に分布する（『事典』 p.106）。すなわち、本研究の要点は所謂“上から”の社格ではなく、全國の神社の普遍的・本質的な地盤への着目である。各地が誇る文化や技術は京

畿から興り黄塵万丈の手本を悉に伝播させたのではなく、尊き先人たちが國國の自然生態系や清らかな水脈を丁寧に俯瞰し、選び抜いた美しい土地に時間をかけて根を下ろしたのであった。主祭神を幾重にも上げて仰ぎ奉り、地に足をつけて蛮勇をふるわず、大自然を敬って開花した気高き文化が日本列島の各地に鎮座しているのを私は知っている。古の地方行政区分の単位で「地方」に根差した神社を分析対象とすることで、「地方」や國、その土地を愛した先人たちが時間をかけて涵養し守り抜いてきた本質が僅かながらも明るみに出るのではないだろうか。

- (14) 66 國 2 島は、『延喜式』や『和名類聚抄』に見られる区分で、五畿 5 箇國、東海道 15 箇國、東山道 8 箇國、北陸道 7 箇國、山陰道 8 箇國、山陽道 8 箇國、南海道 6 箇國、西海道 9 箇國と 2 島(壱岐島、対馬島)で構成される。その後については、「律令の国制はわが古代国家の根幹であり、租庸調もそれが単位とされていたが、平安時代末になるとほとんど形骸化し、国衙は土豪より成る在庁官人の運営するところとなり、中央集権の体制としての意味を失った」(国史大辞典編集委員会編 1983, p.830)とされている。
- (15) 恩智神社(河内國二宮)、坐摩神社(摂津國一宮)、鶴岡八幡宮(相模國一宮)、洲宮神社(安房國二宮)、玉崎神社(下総國二宮)、二宮神社(下総國二宮)、近津神社(陸奥國一宮)、二上射水神社(越中國一宮)、大宮売神社(丹後國二宮)、佐太神社(出雲國二宮)、速谷神社(安藝國二宮)、龜山八幡宮(長門國三宮)、都萬神社(日向國二宮)、加紫久利神社(薩摩國二宮)、聖母宮(壱岐國二宮)。なお、武蔵國は他國の態様と異なる連環が計られており、日本の大石であるがゆえに検討を要する。八方除の守護神、武蔵國総社・大國魂神社(東京都府中市)が一宮から六宮までを合わせ祀り、全国一の宮巡拝会「諸国一の宮一覧図」にも記載がない。武州六社明神の一宮・小野神社(東京都多摩市)と二宮・二宮神社(東京都あきる野市)を集計対象外とし、武州六社明神の三宮・氷川神社(埼玉県さいたま市)を武蔵國一宮として集計した。
- (16) 「大國主神は、大物主神とも、また国作大己貴命ともいう。また葦原醜男ともいう。また八千戈神ともいう。また大國玉神ともいう。また顕國玉神ともいう。その子は皆で 181 柱おいでになる」(宇治谷 1988 a, p.51)。
- (17) 「さむかわ=清らかな水と定義し、創建の年代は不明であるが、神社近くの相模川、本殿裏側の相模川の伏流水が流れていた「難波の小池」が創建と深い関りがあるのではないかと云われており、当地の自然神を祀ったのが神社の発祥と考えるのが適切である。記紀神話に登場しない当社の御祭神、寒川大明神は天津神ではありえず、また近代に於ける社格は国幣中社(明治 4 年列格)である事から、国津神として分類して頂くのが適切と思われる」(相模國一宮・寒川神社 中西正史氏)。約 1600 年に渡り、八方除の守護神として源頼朝、武田信玄、徳川家代々から篤い信仰を受けてきた。
- (18) 2022 年 10 月 14 日に社務所に電話で質問を行い、当社の主祭神、天美豆玉照比売命が天津神として祀られているとの回答を得た。
- (19) 2022 年 10 月 14 日に社務所に電話で問い合わせた。当地の古い呼称「綾女庄」の養蚕機織の神とされ、周辺には「高麗」という苗字の家系が多いことから、朝鮮半島からの渡来の影響があると考えられるが、詳細は不明との回答を得た。
- (20) 宗像三女神のうち一柱のみを祀っている神社もみられる。例えば、志摩國一宮・伊射波神社は市杵島姫神、参河國一宮・砥鹿神社は田心姫神、下野國一宮・日光二荒山神社は田心姫神、紀伊國一宮・丹生都比賣神社は市杵島姫神をそれぞれ祀っている。
- (21) 7 世紀後期から 10 世紀頃まで実施された律令制における地方行政区画。「畿」は古代中国で王城から 500 里四方の土地を意味し、五畿は大和、山城、摂津、河内、和泉の 5 箇國の総称である。初見は『日本書紀』の崇神天皇 10 年 10 月、「畿内(うちくに)」が、四道將軍が派遣された「畿外」と区別されている(宇治谷 1988, p.129)。
- (22) 「東日本」は東山道、東海道、北陸道を合わせた総称、一方の「西日本」は五畿、山陽道、山陰道、

南海道を合わせた総称として規定する。

- (23) コレスポネンダンス分析や数量化Ⅲ類と数理的に同等で、地方 A と地方 B、主祭神 1 と主祭神 2 が存在するグラフの例では、縦軸と横軸の位置関係に着目し、地方 A に主祭神 1 が比較的近距离に布置していれば、主祭神 1 と地方 A の比較的似通った関係性が推察される。地方間、主祭神間の関係性についても同様に似通った特徴を読み取れる。対応分析の詳細は、樋口（2019）に詳しい。
- (24) 本居宣長は、天津神を「天に坐ます神、又天より降坐る神」とし、地祇を「此国に生坐る神」とした（『事典』 p.39）。
- (25) 八幡信仰の総本社、豊前國一宮・宇佐神宮を筆頭に、筑前國一宮・筥崎宮、豊後國一宮・杵原八幡宮、肥前國一宮・千栗八幡宮、肥後國三宮・藤崎八幡宮、対馬國一宮・八幡宮神社で祀られている。加えて、古くは大隅國一宮・鹿児島神宮が大隅正八幡宮、薩摩國一宮・新田神社が新田八幡宮、対馬國一宮・海神神社が上津八幡宮と呼称されていた。
- (26) 特に、若狭國の場合、一宮の若狭彦神社の主祭神が彦火火出見尊、二宮の若狭姫神社の主祭神が豊玉姫となっている。
- (27) 一般的に、本殿の建築様式は、主に八幡造が八幡宮、春日造が春日神社である。神宮の社殿の系統である神明造の原型は、稲などを納める穀倉とされる（『事典』 pp.3-4, pp.173-176）。
- (28) 古くより「己等乃麻知神社」と呼ばれて御祭神は元々から「己等乃麻知比売命」であったが、世が武家社会になって武家の守り神として信仰された八幡神を 1062 年に迎えたことが伝わっている。戦乱の頃、東海道筋にある当社が戦に巻き込まれる恐れが十分にあったことから、「八幡様を表に出す事で、先祖はこの神社をお守りしてきたのだと思います」と 2022 年 10 月 11 日に社務所よりメールで回答を得た。
- (29) 美作國一宮の中山神社の本殿は、大社造ともされる（式内社研究会編 1980, p.292-293）。中山造とは、正面三間、入母屋造、妻入の本殿の造りで、岡山県の津山地方を中心に分布し、中山神社が代表例である（『事典』 p.176）。
- (30) 南北朝時代、長門守護の厚東氏が周防守護の大内弘世に降り、長門國に進出した大内氏が社殿を再建し、1370 年に遷宮式を執り行った。当時からの本殿（国宝）は 5 殿が連なる九間社流造で、室町初期の神社建築としては特異な様式で、5 柱は 1370 年以前からの主祭神と目され、一部は周防國の大内氏が信仰していた神の可能性もある（2022 年 10 月 18 日に社務所に電話で質問した）。
- (31) 満 6 年間隔で執り行われる「式年造営御柱大祭」では、滑らかな木馬に乗って山岳を鳴り響かせつつ、泛地・困地の山峡に長く伸びきった列の断点を次々と分断していく猛々しい漢たちに敬意を表する。
- (32) 「ケ」は食物の意味で、食物を司る偉大な女神、五穀の神。伊邪那岐神と伊邪那美神の子で、粟国の神格化でもある。素戔嗚尊が食物を乞うた際に、鼻、口、尻より種々の食物を取り出して調理して奉ったために殺された。屍が蚕、稲、粟、小豆、麦、大豆の種となった（『事典』 pp.55-56）。
- (33) 本研究の便宜上、上位区分として定義した。
- (34) 『日本書紀』では神功皇后から仁徳天皇、雄略天皇、継体天皇、欽明天皇、推古天皇、天智天皇までの巻に、筑紫を基点とした京畿の南船北馬が随所に記されている。
- (35) 豊後國一宮・西寒多神社、薩摩國一宮・新田神社、壱岐國一宮・天手長男神社。
- (36) 一宮の加茂別雷神社に賀茂別雷命、同じく加茂御祖神社に玉櫛媛、賀茂建角身命がそれぞれ祀られている。
- (37) 一宮の枚岡神社に天兒屋命、比売神（天美玉豆照比売命）、経津主神、建御雷神、二宮の恩智神社に大御食津彦命、大御食津姫命（豊受大神）がそれぞれ祀られている。
- (38) 一宮の大神神社に大物主神（大国主神）が祀られている。
- (39) 一宮の大山祇神社に大山祇神が祀られている。
- (40) その他の神社や朝廷による格式などではなく、研究対象とした一宮・二宮・三宮の社格の上位・下

位についての検討である。『日本書紀』の崇神天皇7年、天社・国つ社・神地・神戸(宇治谷1988, p.124)の別が見られる。律令体制以降には式内社、式外社、官幣社、国幣社、二十二社など様々な社格が付与され、明治時代に入ると近代社格制度が定められて官社と諸社に大別された。

- (41) 一宮の水川神社に素戔鳴尊、櫛名田比売、大国主神、同じく水川女體神社に櫛名田比売がそれぞれ祀られている。
- (42) 一宮の浅間神社に木花之佐久夜毘売命、二宮の美和神社に大物主神(大国主神)、三宮の玉諸神社に大国主神がそれぞれ祀られている。
- (43) 一宮の安房神社に天太玉命、同じく洲崎神社に天比理刀咩命、二宮の洲宮神社にも天比理刀咩命がそれぞれ祀られている。
- (44) 「神代三陵」と総称される日向三代の陵墓について、薩摩國一宮・新田神社境内の神亀山は瓊瓊杵尊の陵墓である可愛山陵、鹿児島県霧島市溝辺町麓の皇族陵は彦火火出見尊の陵墓である高屋山上陵、鹿児島県鹿児島市吾平町上名の皇族陵は鷗鷺草葺不合尊の陵墓である吾平山上陵として宮内庁によって治定されている。また、鶴戸神宮は、豊玉姫が鷗鷺草葺不合尊を出産する産屋のあった場所とされ、青島神社は、豊玉姫が山幸彦と出会い、結ばれた場所として少童命の宮の樹木や井戸、両者に関するコンテンツを観光資源として活用している。高塚墳319基が現存する西都原古墳群を歩き、九州第1位の規模を誇る女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳、すなわち宮内庁が推定する瓊瓊杵尊と木花之佐久夜毘売命とが常しえに隣り合った御陵を神拝する。

【参考文献】

- 足立尚計(2001)「継体天皇を祭神とする神社について」『日本宗教文化史研究』5(1), pp.90-112.
- 文化庁編(2018)『宗教年鑑 平成30年版』文化庁
- 中村啓信訳注(2009)『新版 古事記』角川学芸出版
- 日本観光協会編(2004)「特集 観光の原点を探る「社寺参り」」『月刊観光』450, pp.32-52.
- 羽生敦子(2019)「コンテンツ・ツーリズムとしてのルルド巡礼の一考察」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』2019年12月, pp.353-356.
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-』ナカニシヤ出版
- 樋口耕一(2017)「言語研究の分野におけるKH Coder活用の可能性」『計量国語学』31(1), pp.36-45.
- 樋口耕一(2019)「計量テキスト分析における対応分析の活用-同時布置の仕組みと読み取り方を中心に-」『コンピュータ & エデュケーション』47, pp.18-24.
- 平泉隆房(2019)「祭神別神社分布図による諸信仰の考察(一)-分布図の提示を中心として-」『日本学研究』22, pp.1-36.
- 保坂泰彦(2017)「地域神社の祭神と集落の結集についての試論-秋田県男鹿市渡部神社を事例として-」『常民文化』40, pp.115-125.
- 北條勝貴(1997)「松尾大社における市杵嶋姫命の鎮座について-主に秦氏の渡来と葛野坐月読神社・木嶋坐天照御魂神社の創祀に関連して-」『国立歴史民俗博物館研究報告』72, pp.41-80.
- 池尻篤(2011)「鷲宮神社の祭神-近世における祭神変容の一事例-」『駒沢史学』76, pp.99-114.
- 井上智勝(1993)「寛政期における氏神・流行神と朝廷権威-大阪の氏神社における主祭神変化の理由-」『日本史研究』365, pp.1-26.
- 岩崎達也(2014)「憧れの人を追うツーリズムの行動分析-ジェニーズを追う女性たちのツアー行動と消費者行動論による検証-」『コンテンツツーリズム学会論文集』1, pp.2-14.
- 観光庁編(2019)『令和元年版 観光白書』昭和情報プロセス
- 河合隼雄(2003)『神話と日本人の心』岩波書店

- 国土交通省観光地域振興課・経済産業省文化情報関連産業課・文化庁芸術文化課（2005）「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査：報告書」
- 国土交通省編（2019）『国土交通白書 2019 新しい時代に応える国土交通政策』日経印刷。
- 國學院大学日本文化研究所編（1999）『神道事典』弘文堂
- 国史大辞典編集委員会編（1983）『国史大辞典 第4巻』吉川弘文館
- Krippendorff, K. (1981) *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology*, CA: SAGE Publications. (三上俊治ほか訳 1989年『メッセージ分析の技法－「内容分析」への招待－』勁草書房)
- Kuckartz, U. (2014) *Qualitative Text Analysis: A Guide to Methods, Practice & Using Software*, London: SAGE Publications. (佐藤郁哉訳 2018『質的テキスト分析法：基本原理・分析技法・ソフトウェア』新曜社)
- 増淵敏之（2010）『物語を旅するひとびと－コンテンツ・ツーリズムとは何か－』彩流社
- 宮本真晴（1997）「河北潟地方の神社と祭神の分析Ⅰ」『河北潟総合研究』1, pp.13-44.
- 宮本真晴（1998）「河北潟地方の神社と祭神の分析Ⅱ」『河北潟総合研究』2, pp.3-10.
- 宮崎裕二（2016）「コンテンツツーリズムにおけるキャラクターを活用した持続的な観光地づくり－「ピーターラビット」の故郷、湖水地方の事例研究－」『コンテンツツーリズム学会論文集』3, pp.2-11.
- 岡本健（2012）「旅行者主導型コンテンツツーリズムにおける観光資源マネジメント：らき☆すた聖地「鷲宮」とけいおん！聖地「豊郷」の比較から」『日本情報経営学会誌』32(3), pp.59-71.
- ボッケンドルフ・ローレンツ（2019）「日本の神聖な観光スポット－二つの著名な神社とその地方観光政策の比較－」『現代社会研究』16, pp.111-121.
- 斎藤光正（1953）「観光事業と神社仏閣の立場－神社仏閣は観光事業による最大の受益者である。だが、－」『観光』47, pp.22-25.
- 志賀剛（1960）『式内社の研究 第1巻 概論・南海道』雄山閣
- 式内社研究会編（1980）『式内社調査報告 第二十二巻』皇學館大學出版部
- 篠原靖（2013）『観光デザイン入門－21世紀は観光創造時代！－』日本経済評論社
- 友田光（2012）「河内神信仰の一考察－神社の祭神について－」『山口県神道史研究』24, pp.1-12.
- 虎尾俊哉編（2000）『延喜式 上』集英社
- 宇治谷孟（1988 a）『日本書紀（上）』講談社
- 宇治谷孟（1988 b）『日本書紀（下）』講談社
- 渡辺滋（2020）「仁壁神社についての一考察－名称の由来や当初の祭神の問題を中心に－」『山口県立大学学術情報』13, pp.13-26.
- 山村高淑（2016）「趣旨説明と問題提起：コンテンツ・ツーリズム研究の課題と可能性」『CATS 叢書』8, pp.1-16.
- 【新聞記事】
- 朝日新聞（2017年4月12日）「都市の一夜、もてなしに知恵 宿坊で写経・座禅体験 訪日客狙う関西のホテル」『朝日新聞』大阪朝刊1 経済, p.9.
- 日本経済新聞（2017年8月4日）「乾杯 婚活 開かれた寺 境内でビアガーデンや催し 若者 訪れやすい雰囲気」『日本経済新聞』大阪夕刊社会, p.11.
- 日本経済新聞（2018年2月22日）「三味線や太鼓 寺でライブ」『日本経済新聞』朝刊地方経済北陸, p.8.
- 読売新聞（2018年8月2日）「[おまいり日和] 元僧坊で民泊 三井寺 古刹 ゆったり宿坊」『読売新聞』大阪夕刊タラジ, p.2.

読売新聞 (2018年10月30日) 「ありがたい「萌えキャラ神」奈良・吉祥草寺の役小角奈 本堂にフィギュア」『読売新聞』大阪夕刊2社, p.10.

〔ウェブサイト〕

観光庁 (2022年8月31日) “政策について>観光地域づくり>テーマ別観光による地方誘客事業”

https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/theme_betsu.html (最終閲覧日 2022年10月21日)

全国寺社観光協会 (2021年10月29日) “寺社観光とは”

<https://jisya-kk.jp/about/index.html> (最終閲覧日 2022年10月22日)

(こうち よしあき 公共政策学科)

2022年11月15日受理